

大阪天満宮文庫蔵長松本『寛正六年正月十六日何人百韻』 訳注(二)

伊藤 伸江・奥田 勲

この訳注は、大阪天満宮文庫蔵長松本『寛正六年正月十六日何人百韻』の訳注(二)、百韻の後半五十句分の注であり、科研費基盤研究(C)「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」(研究代表者伊藤、研究分担者奥田)の成果である。注釈等の執筆に関しては、訳注(一)同様、伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめた。

凡 例

一、底本は大阪天満宮蔵『寛正六年正月十六日賦何人百韻』(長松本)である。対校本は、大阪天満宮蔵延宗本と、江藤保定著『宗祇の研

究』(昭和四二・風間書房)所収野坂元定本(野坂本)である。なお、野坂本原本の閲覧がむずかしい状況であり、野坂本の校異は厳密にはなし得ず、参考にあげる際にはその旨を含んで挙げている。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は百韻の翻刻に示してあり、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各

懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては、私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

一、各句には、【式目】【作者】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し【現代語訳】の他に【付合】【二句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には【校異】【考察】【備考】【他出文献】の項目も設けた。

【注釈】

(三折 表 一) みかゆるばかり里は荒れけり

五一 捨てはつる身はもとの身の数ならで 元胤

【校異】身は―身も(野坂本) ならて―ならず(野坂本) 胤―説(野坂本)

【式目】捨てはつる身(釈教) 身(人倫) 人倫与人倫(可嫌打越物)

【作者】元胤

【語釈】●捨てはつる身 出家をしてすっかり以前と変わってしまった我が身。「捨てはつる身のかくれ家をおもふより外には誰を松虫のこゑ」(耕雲千首・山家虫・八九〇)。

●もとの身 普通りの我が身。伊勢物語第四段の情景を彷彿とさせる表現。「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」(古今集・恋五・七四七・在原業平、伊勢物語第四段)。「さとはあれて月やあらぬと恨みても誰あさぢふに衣うつらむ」(新古今集・秋下・四七八・藤原良経) ●数ならで 数のうちに入らない。「法師ばかり羨ましからぬ物はあらじ。「人には木の端のやうに思はるゝよ」と清少納言が書ける、さることぞかし」。(徒然草第一段)。「数ならで身をかくれ家はかひもなし／草引つる古郷の庭」(河越千句第四百韻・四七／四八・宗祇／幾弘)。

【付合】荒れた里の情景から、伊勢物語第四段を思い、さらに出家の身となって一段と変わってしまったとした。

【二句立】出家をしてしまったこの身は、もとの身とくらべても数のうちに入らないことだ。

【現代語訳】(前句 見違えるほどに里は荒れていることよ。) 出家をしてしまったこの身は、もとの身とくらべても数のうちに入らず、見違える程のいたらくなのだが、そんな私が見てもひどい荒れようだ。

(三折 表 二) 捨てはつる身はもとの身の数ならで

五二 訪はれんことや今はたのまじ 専順

【校異】 たのまし―たえまし (野坂本)

【式目】 訪はれん (恋)

【作者】 専順

【語釈】 ●訪はれんこと 訪れてもらうこと。「この暮れもとはれんことはよもぎふの末葉の風の秋のはげしさ」(新統古今集・恋三・一二三三・読人しらず (宗良親王))。●今はたのまじ 今は頼みにすまい。「さだめなき人をわすれて待つ暮れに／げにあだなりや今はたのまじ」(応仁二年宗祇独吟百韻・三九／四〇)。

【付合】 出家者ゆえに訪問客もあてにできないとした付合。一句では恋の句。

【一句立】 あの人に訪れてもらえる見込みは、あるだろうか、いやもうあてにはすまい。

【現代語訳】 (前句) 出家をしてしまったこの身は、もとの身とくらべても数のうちに入らないのだから、(訪問してもらうようなことは、あるだろうか、ないだろうか、もうあてにするまい)。

(三折 表 三) 訪はれんことや今はたのまじ

五三 つつみ来し契りはよそにあらはれて 幸綱

【式目】 契り (恋)

【作者】 幸綱

【語釈】 ●つつみ来し契り 隠してきた二人の仲。「なき名ぞといひはてよとやつつみこし契の末は遠ざかるらん」(新統古今集・恋五・忍絶恋・一五三五・二条為遠)。●よそ 無関係な所。

【付合】 前句の思いの理由を付けた。

【一句立】 隠して来た二人の仲は、関係のない所で知られてしまつて。
【現代語訳】 (前句) あの人に訪れてもらえることは、あるだろうか、いやもうあてにはすまい。隠して来た二人の仲は、関係のない所で知られてしまつたから。

(三折 表 四) つつみ来し契りはよそにあらはれて

五四 思ひの中に程は経にけり 行動

【式目】 思ひ (恋)

【作者】 行動

【語釈】 ●思ひの中に 思慕し続けるうちに。「おきそふる露によなよなぬれこしは思ひの中に乾く袖かは」(蜻蛉日記・源宰相かねたたと聞えし人の御むすめ)。●程は経にけり 時はたつてしまつた。

【付合】 人目を忍ぶ仲が評判になつてしまつたために、逢えないまま、いたずらに時がすぎると付けた。五二・五三の付合からあまり離れ

ていない。

【一句立】あの人を慕い続けるうちに、時はたつてしまったことよ。

【現代語訳】（前句 隠して来た二人の仲は、関係のない所で知られていて会う事もかなわない。）一人あの人を慕い続けるうちに、時はたつてしまったことよ。

（三折 表 五） 思ひの中に程は経にけり

五五 風まぜに長雨ふる江の泊り舟 宗祇

【校異】まぜ―ま□（野坂本） 祇―怡（野坂本）

【式目】泊り舟 雑 cf 旅（産衣） ふる江（入江は水辺・体） 泊

り舟（舟は水辺・用、新式今案においては、水辺体用之外） 長雨

（降物・連歌新式追加並新式今案等）では一座二句物） 風与風（可

隔五句物） 水辺与水辺（可隔五句物）

【作者】宗祇

【語釈】●風まぜ 雨や雪が風と共に降る様子。風まじり。万葉歌に見られる表現「風交」の『新古今集』や『類聚古集』など次点の

訓に基づく語句。「風交ぜに雪はふりつつしかすがに霞たなびきはるは来にけり」（新古今集・春上・八・詠み人しらず、万葉一八三六歌「風交じり雪は降りつつしかすがに霞たなびき春さにけり」。

●長雨ふる江 長雨の降る、古い入江。「長雨」には、前句の「思ひ」

に縁の深い「眺め」を掛け、「古」に「降る」を掛けている。「独のみながめふるやのつまなれば人を忍ぶの草ぞおひける」（古今集・恋五・七六九・貞登）。●泊り舟 停泊している舟。この語は、「専順五百句」（四四三）や、『竹林抄』四三二（専順）にも見え、連衆の中で専順がよく使っていたようである。「山風吹けば雨きほふなり／あしそよぐ湊いり江の泊舟」（表佐千句第一百韻・四八／四九・紹永／専順）。

【付合】恋の句から思い切つて情景を転換した句。古今集七六九番（歌の技巧を転用している）。

【一句立】風まじりに長雨が降り続けている古びた入江には、泊っている舟がいて。

【現代語訳】（前句 一人あの人を慕い続けるうちに、時はたつてしまったことよ。）物思いにふけつていけば、風まじりに長雨が降り続く中、古びた入江には、雨のために出立することができずに泊っている舟がいる。

（三折 表 六） 風まぜに長雨ふる江の泊り舟

五六 みぎはの松は浪に浮かべる 大況

【校異】は―そ（野坂本） 況―阮（野坂本）

【式目】雑 松（植物） みぎは（水辺・体） 浪（水辺・用） 三

二句同様、水辺の体と用を一句の内に用いており、不審。

【作者】 大況

【語釈】 ●みぎはの松 水際に生えた松。その立地により、水に姿が映り、また根元まで波がうちよせる。「すみそむるすゑの心の見ゆるかなみぎはの松のかげをうつせば」（拾遺集・雑賀・一一七五・藤原公任）。「汀トアラバ、松」（連珠合璧集）。

【付合】 長雨の入江に、松の生える海岸べりの情景を加えた。長雨の増水によって松が水没している様である。「入江トアラバ、松」（連珠合璧集）。「長雨に舟まつ小河水こえて」（小鴨千句第十百韻・一九・宗砌）。

【一句立】 水際に生えている松はまるで浪に浮かんでいるように見える。

【現代語訳】（前句 風まじりに長雨の降り続く、古びた入江には、動けずに停泊している舟がいて。）水際に生えている松は、増水ゆえに浪に浮かんでいるように見える。

（三折 表 七） みぎはの松は浪に浮かべる

五七 住吉や残る西日ははるかにて 心敬

【式目】 雑 住吉（名所） 西日（光物・可隔三句物）

【作者】 心敬

【語釈】 ●住吉 摂津国の歌枕。住吉大社があり、住吉の入江は松の名所であった。●はるかにて 「杳」（長松本）は遠く奥深い様を表わす。●西日 西に傾いた日差し。「ならの広葉にまじる松の葉／暑かりし外面の西日かけるひて」（熊野千句第六百韻・六〇／六一・宗祇／専順）。「まことしる道にはこゝろかけもせて／にし日になるをいとふかり人」（河越千句第四百韻・八三／八四・幾弘／心敬）。

【付合】 「松」に「住吉」を付け、前句を住吉の松のこととした。「住吉の岸の松が根うち曝し寄せくる波の音のさやけさ」（万葉集・巻七・一一五九）。前句の「松」は「待つ」との掛詞。また、西方浄土が連想される「西日」を使い、次の句での変化を促していく付合となる。「夕日のかげの西の山のはにかくる、を見ても、「日の入給ふ所は、西方浄土にてあんなり。いつかわれらもかしこに生れて、物を思はで過ぐさむずらん。」（平家物語・祇王）。

【一句立】 ここ住吉では、西の空に残った西日は海のはるか先の方にあつて。

【現代語訳】（前句 住吉の岸の松は、水際にあり、まるで浪の上に浮かんでいるように見える。）西の空に残る西日は、水際近くで、松ならぬ、待つてはいても、はるか遠くへだたつていて。

（三折 表 八） 住吉やのこる西日ははるかにて

五八 そなたとさすや頼む彼の岸 専順

【校異】 こなた―そなた（野坂本） 野坂本により訂正。

【式目】 彼の岸（釈教） 岸只一、名所一、彼岸一（一座三句物（『連歌新式並新式今案等』））

【作者】 専順

【語釈】 ●そなた そちら側 ●彼岸 「彼岸」を訓読したもの。

「彼岸」とは、煩惱を解脱した悟りの境地。「彼岸にうかべる月の舟よせよ出ては西にゆかぬ夜もなし」（草根集・釈教・六九六・宝徳三年六月十六日詠。「をよばぬこゝろなげく彼きし／すみよしや松にここの葉かけ侘て」（芝草内連歌合・二九八六／二九八七）。

【付合】 住吉の西ということから、西方浄土である彼岸を付けた。

【一句立】 そちらとさす方角こそは、心からすがっている彼岸の方角か。

【現代語訳】（前句）ここ住吉の西の空に残った西日は海のはるか先の方にあり、西方浄土もまた同じく西海のはるか彼方にあるのだ。）そちらだと指さす方角こそは、往生をとげたいと頼みに思っている彼の岸、彼岸なのか。

（三折 表 九） そなたとさすや頼む彼の岸

五九 終に身をやどしはつべき浮き世かは 行助

【校異】 浮世^{カク}界―浮世かは（野坂本）・浮世^{カク}かハ（延宗本） 両本により訂正。

【式目】 浮き世（述懐）「述懐の心、うき世」（『連珠合璧集』。身（人倫） 世（二座五句物） 世只一 浮世^{カク}中に一 恋世^{カク} 前世後世などに一世与浮世^{カク}中（可嫌打越物・新式今案） 人倫与人倫（可嫌打越物）

【作者】 行助

【語釈】 ●やどしはつべき 死ぬまでその中で生活するはずの。「さのみやは葉末にもろき夕露をやどしはてじと萩の下風」（高良玉垂宮神秘書紙背和歌・一四〇・佚名）。●浮き世かは ああ、なんとつらい世であろうか。「いづくにもかくあさましきうき世かはあなおほつかなたれにとはまし」（多武峰少将物語・愛宮）。

【付合】 「彼の岸」と対比して「浮き世」を付ける。

【一句立】 我が身の最期のその時まで、この身を置いて生きていかなばならない、つらいことばかりの世であるのか。

【現代語訳】（前句）そちらとさす方角こそは、心からすがっている彼岸の方角なのか。）ああ、それでも最期を迎えるその時まで、この身を、つらい世に置いて生きて行かなばならないのか。

（三折 表 一〇） 終に身をやどしはつべき浮き世かは

六〇 わが老い未や草の上露 心敬

【式目】 露（秋） 老い（二座二句物） 老只一 鳥末などに一 露（降物・可隔三句物） 草（植物） 草与草（可隔五句物）

【作者】 心敬

【語釈】 ●老い末 年をとっていく行末。「かげあらばもれじといひしゆかりまでたのみむなしき松のおい末」（寂身法師集・三三二）。●

草の上露 草の上の露。「朝日影いでてぞきゆる吹く風ははらひのこせる草のうは露」（耕雲千首・朝露・三一九）。ここでは自分の命を、草の上の露のようなもろくはかないものとたとえている。「とにかくに身のつれなさもはかなさも残るひとつの露の上かな」（心敬集・露・二五〇）。

【付合】 「やどす」に「露」を付けた。

【二句立】 私の老い先などは、草の上の露のようにはかないものなのだ。

【現代語訳】（前句） ああ、そんなはかない身であっても、死ぬまでこの身を置いて生きて行かねばならない、つらいことばかりのこの世なのか。私の老い先など、草の上の露のようにはかないものなの。

（三折 表 一一） わが老い末や草の上露

六一 はかなしや風待つ程の秋の夢 専順

【式目】 秋（秋） 風与風（可隔五句物） 夢与夢（可隔七句物）

【作者】 専順

【語釈】 ●風待つ程 露を払い、こぼしてしまふ風が吹くのを待つ、短い間。世の中の無常なさまをたとえる。「あけゆけば葉末にのほる白露の風待つほどやわが身なるらむ」（登蓮法師集・無常・二五）。

●秋の夢 秋の夜の夢。はかなく消えるものの象徴。「絡糸響冷秋（夢短」（絡糸響き冷まじうして秋の夢短し）（新撰朗詠集・虫・三一〇・慶滋保胤）。「老いぬればことしばかりや秋の夢いづれの暮か我也別れん」（松下集・暮秋夢・一一三五）。「秋の夢さそはぬ虫は胡蝶にて／結ぶ契の化し野の露」（初瀬千句第九百韻・七五／七六・日晟／生阿）。

【付合】 はかなく短いものとして、露、夢と並べた。

【二句立】 はかないことだよ。風の訪れを待つ、そんな短い間に見る秋の夢は。

【現代語訳】（前句） 私の老い先などは、草の上の露のような短いものなのだ。はかないことよ、露をこぼす風の訪れを待つわずかな時間の中に見る秋の夢は。

（三折 表 一一） はかなしや風待つ程の秋の夢

六二 いとど夜寒の思ひ寝ぞなき 宗祇

【式目】夜寒（秋） 夜寒（一座一句物）『連歌新式追加並新式今案等』（肖柏追加）に「秋寒 や、さむき・夜寒などいづれにても只一なり」とある。） 思ひ寝（恋）

【作者】宗祇

【語釈】●夜寒 秋の夜に感じる寒さ。基本的には秋が深まった末の頃の皮膚感覚で詠まれることが多いが、以前よりも寒く、もの寂しく感じた際に使われる言葉である。用例は少ないが、「二月の夜寒の霜や氷るらん」（小鴨千句第七百韻・三六・之好）のような春の例もある。「まどろめばふきおどろかす風の音にいとど夜さむになるをしぞ思ふ」（和泉式部集・六四〇）。「末の秋 一、夜寒 夜寒と続かねば秋にあらず、夜を寒みとは冬なり」（至宝抄）。●思ひ寝 恋しい人のことを思いながら寝ること。「我袖の雫や海と成ぬらん／＼しがのまくらの下の思ひね」（顕証院千句第三百韻・五三／五四・超心／専順）。

【付合】前句の「風待つ」を恋人の訪れを期待している状況とした。「君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く」（万葉集・巻一・四八八・額田王）。また、前句の「風」から「夜寒」が呼びこまれる（↓【考察】）。

【一句立】いちだんと夜寒になってきて寒く寂しく、恋しい人を思いながらの思い寝などできないのだ。

【現代語訳】（前句）あの人の訪れかと秋風が吹くのを待っていた、その短い間に見る秋の夢はなんとはかなかったことよ。今はもういちだんと夜寒になってきて、寒くて寂しくて、恋しい人を思いながらの思い寝などできないのだ。

【考察】和歌における「夜寒」は、寂寥感を伴い、「風」「掃衣」といった聴覚的題材と組み合わされる。また、中世には散文作品も含め、都の外に出て感じる感覚として定着していくようである。

（三折表 一三） いとど夜寒の思ひ寝ぞなき

六三 袖をなほ月は訪へども人は来で 実中

【式目】月（秋） 人（人倫） 袖与袖（可隔五句物）

【作者】実中

【語釈】●月は訪へども 月は訪れてくれるけれども。涙のたまった袖に月が映することをいう。「袖訪ふ月」と圧縮した表現を正徹、正広らが使っている。「露はらふ佐野の渡りの秋風に袖とふ月の宿だにもなし」（松下集・名所秋月・六〇〇詞書内嵯川親世歌）。●人は来で あの人には来ないで。「月見ばといひしばかりの人は来で楨の戸叩く庭の松風」（新古今集・雑上・一五一九・藤原良経）。

【付合】前句の「夜寒」に「月」をつけた。

【一句立】月は昔と変わりなく、泣き濡れている私の袖を訪れてくる

けれど、待つ人は来ないで。

【現代語訳】（前句 いちだんと夜寒になってきて、恋しい人を思いながらの思い寝などできないのだ。）月は昔と変わりなく、泣き濡れている私の袖を訪れてくるけれど、待つているあの人は来ないで。

（三折 表 一四） 袖をなほ月は訪へども人は来で

六四 すだれやつるる古宮の内 心敬

【式目】 雑 古宮（「宮」は非居所（連歌新式並新式今案等））
すだれ（居所・用（連歌新式並新式今案等））

【作者】 心敬

【語釈】 ●やつるる 古びてみすばらしくなる。「かげやどす露のみしげく成りはてて草にやつるる古郷の月」（新古今集・雑中・二六六八・飛鳥井雅経）。●古宮のうち 古宮は長い年月が経ち古び、忘れられた宮殿。「古宮と云に、みなせ・おのへ・たかまじ・宇治・鳥羽・蓬生の宿をも付也。ひたちの宮の女也。たゞ涙のみ古宮のうち／おもはずに六十の秋をすごしきて 祇 此句の心は、上陽人と云女は、唐の玄宗皇帝の后也。楊貴妃に思かへられて、十六の歳より六十歳まで、上陽宮と云宮に籠て、窓打雨に袖をしほりし事也。女の思など云に、古宮付たるも此古事也。此外、古宮敷をしらず。可尋之」（連歌寄合）。「山人のわくるおのへに萩ちりて／暮ればさびしふる

宮のうち」（小鴨千句第六百韻・九五／九六・心敬／之好）。

【付合】 恋人に忘れられた女性の心情から、荒れた宮の内の情景を付ける。

【二句立】 簾がみすばらしくなった古い宮の中。

【現代語訳】（前句 昔と変わりなく、月は私の袖を訪れてくるけれど、待つ人は来る事はなく。）簾がみすばしくなった古い宮の中。

【考察】 「古宮」には多くの場所があてはめうる。鳥羽の古宮の例（熊野千句第七百韻六六）、山科の宮に取りなす例（同第九百韻四二／四三）の如くであり、心敬にも、「涙は袖にふる宮のみち／爪木とる尾上と成ぬ里はあれて」の付合に対し、「ひとへに、後鳥羽院の、水無瀬の御跡の哀を、申侍也」との自注がある（芝草（文明本））。心敬は、古宮の情景をよく詠んでおり、「むかしにかはる水くきの跡／古宮の池は草かる野となりて」（心玉集・一五六〇／一五六一）と、あまりに変わりはてたありさまを述べたり、懐旧の思いをこめた情景を「ふりぬる宮にほふさくら木／春の月破れたるみすにかげふけて」（芝草内連歌合（松平文庫本））と優美に詠んだりもしている。

『連歌寄合』が示す上陽白髮人の故事から古宮をとりなす例など、古宮という言葉は、恋の句に続けて、忘れられた薄幸の女性のイメージを宿すこともある。もはや尋ねてこない恋人を思う女性の心情から付けるこの付合は、『源氏物語』蓬生巻の面影もわずかながらあ

るか。「かくいみじき野ら敷なれども、さすがに寝殿の内ばかりはありし御しつらひ変らず。」「月明かくさし出でたるに見れば、格子二間はかりあげて、簾動くけしきなり。」(源氏物語・蓬生)。

【三折 裏 一】 すだれやつるる古宮の内

六五 つばくらめ出で入る軒の隙しげく 行助

【式目】 つばくらめ(春) 軒(居所・体)

【作者】 行助

【語釈】 ●出で入る 出たり入ったりする。「めぐるえのながれ洲崎のはなれやに燕いで入春日のどけし」(草根集・春江・二七五三(巻四))。

【付合】 古宮の古く朽ちた様子から、つばめの飛び交う様子を付けた。

古宮に毎年燕が訪れる様を行助が詠んだものに「春をわすれぬふる宮のうち／おなじ巢に心やかくるつばくらめ」(行助句集・一六三五／一六三六)がある。また、「すだれ」と「つばくらめ」を同時に詠む歌に「つばくらめすだれの外にあまた見えて春日のどけみ人かげもせず」(風雅集・春中・二二九・光厳院)。

【一句立】 燕が出たり入ったりする軒はすきまがたくさんあり。

【現代語訳】 (前句 古宮の中はすだれがみすばらしくなっていて)

燕が出たり入ったりする軒にはすきまがたくさんある。

【考察】 燕の和歌は、正徹がその生態をよく観察した歌を多く詠む。正徹には「簾外燕」題の歌もあり、簾をかすめ出入りする燕が詠まれている。この題は師兼千首、後花園院御集に各一首ある程度の珍しいものだが、心敬も受け継いでいる。「袖ちかくいりくるつばめをちかたにかへる羽はやきこすの追かぜ」(心敬僧都十牀和歌・簾外燕・二二三)。

【三折 裏 二】 つばくらめ出で入る軒の隙しげく

六六 見えつ隠れつ霞む山本 元鵜

【校異】 鵜―説(野坂本)

【式目】 霞む(春) 山(山類・体)

【作者】 元鵜

【語釈】 ●見えつ隠れつ 見えたり隠れたり。「野嶋にかかる波のした草／姫百合のみえつかくれつさく花に」(菟玖波集・夏・二四〇・導善法師) ●霞む山本 「帰る雁つれなく見ゆる有明の月を残して霞む山本」(隣女集・帰雁・二八四)。

【付合】 「出で入る」に「見えつ隠れつ」を対応させた。ここは軒のあたりで燕が見え隠れする様と、霞によって山のふもとのあたりの情景が見え隠れするさまをあわせて表現する。

【一句立】 見えたり隠れたり、山の麓がかすんでいる。

【現代語訳】（前句 燕が出たり入ったりする軒にはすきまがたくさんあって）燕の姿が見え隠れし、山の麓には霞がたち、風景が見えたりまた隠れたりしていることよ。

（三折 裏 三） 見えつ隠れつ霞む山本

六七 舟遠き春の朝川日のさして 宗祇

【式目】 春（春） 日（光物） 舟（水辺・用、新式今案では体用之外）、 朝川（水辺・体） 日与日（可隔五句物）

【作者】 宗祇

【語釈】 ●朝川 朝の川。ここは「舟遠き」ということから「浅川」を掛けていると見る。「吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば ももしきの 大宮人は 船並めて 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る」(万葉集・卷一・三六・吉野宮に幸せる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌〔拾遺集〕にも再録)。「山里は朝川渡る 駒の音に瀬々の水の程を知るかな」(六百番歌合・冬朝・五四一・顕昭)より、冬の朝の凍った川を連想させる言葉であり、宗祇は「春の」と断る。

【付合】 付句の「日のさして」は前句「見えつ隠れつ」に続く。山と川の対比をなし、霞が朝の日光に消え行く様と遠くの舟が見え隠れするさまを表現する。

万葉集三六歌の情景を念頭に置けば、前句は吉野山の情景、付句は吉野川の情景となろうか。

【一句立】 舟が遠くに見えている、春の朝の川は浅く、川面に朝日がさしてきて。

【現代語訳】（前句 山の麓には霞がたち、風景が見えたり隠れたりしていることよ。）舟が遠くに見えている、春の朝の川は浅く、川面に朝日がさしてきて。

【考察】「朝川」は、万葉集に語釈に掲出した長歌や、「人言を繁み言 痛み己が世に いまだ渡らぬ朝川渡る」(万葉集・卷二・一一六・但馬皇女)、長歌「生ける者 死ぬといふことに 免れぬ ものにしあれば 佐保川を 朝川渡り」(万葉集・卷三・四六〇・七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願の死去しことを悲嘆して作る歌一首)があり、いわゆる万葉詞である。「朝川渡る」は「六百番歌合」で「山里は朝川渡る 駒の音に瀬々の水の程を知るかな」(冬朝・五四一・顕昭)と顕昭が使用し、また清輔の『和歌初学抄』には「朝川」が入り、六条藤家の万葉学の知識であった事が知られる。「八雲御抄」卷三枝葉部には万葉歌による「朝川」「夕川」が載り、その流れから、今川了俊が正徹に与えた『言塵集』にも「河」の項目に「朝河 夕河 只も 夕河わたりなど、詠」と伝わった。「朝川」「夕川」共に「草根集」に詠まれており、特に「朝川」は、正徹が独自に好んで使用した語句であ

る。先の顯昭歌「朝川わたる」は冬季の情景であり、これ以降わずかながらこの表現を用いて冬の歌が散見されていくが、正徹は「朝川」を詠むに際して自由に季節を設定し、情景も多様に詠み込んだ。彼の歌の中には、特に水面に立つ水煙を詠み込んだものが多く、そうした「朝川」と「水煙」の組み合わせは『親当句集』にも見られる（「あさ川は水のけふりやかすむらん」〔親当句集一九六〕）。なお、歌語としての「朝川」は、正徹以外の歌人には歌例もわずかであり、好まれた言葉ではなかった。正徹も参加した『前撰政治家歌合』（嘉吉元年）においては、「朝川」を使用した冷泉持和の歌に、衆議判（判詞は一條兼良執筆）で「朝川万葉より出でたりと申しながら、いたくこのましからぬにや」と批判がなされている。万葉四六〇歌は挽歌であり、また正徹詠に「朝川の水の煙や恋すてふ人の身なげし思ひなるらん」〔章根集・応永二十六年十月一日一夜百首・一七二〕があり、「朝川」は忌詞であったか。連歌では時代が下るにつれて秋冬の用例に加えて春の用例が見えはじめる。宗祇のこの句もそうした動きの一環であり、春の句であるところが新しい。万葉三六歌の学習を思ふべきか。「釣する袖のひたす朝川／さしのぼる小舟は棹も短き」〔熊野千句第四百韻・六〇／六一・心敬／盛長〕、「根芹つみつ、かへるさの道／あさ川の霞をあらふ波こえて」（心玉集・春・九二八／九二九・心敬）など。

（三折 裏 四） 舟遠き春の朝川日のさして

六八 柳に高く風なびく色 宗怡

【式目】柳（春） 柳只一 青柳一 秋冬の間一（一座三句物） 風与風（可隔五句物）

【作者】宗怡

【語釈】●風なびく 風が流れるように吹く。「おほかたの秋のなさけの荻のはいかにせよとて風なびくらん」（正治初度百首・秋・四二・後鳥羽院）。「柳トアラバ、なびく」（連珠合璧集）。

【付合】「朝川」に「柳」を付けた。「柳トアラバ、川」（連珠合璧集）。

【一句立】柳には高く風が吹き、葉が緑色になびく。

【現代語訳】（前句 舟が遠くに見えている春の朝の川には、朝日がさしてきて。）川べりの柳には高く風が吹き、葉が緑色になびいてる。

（三折 裏 五） 柳に高く風なびく色

六九 木の間より一葉の落つる秋寒み 実中

【校異】寒み―ちかみ（野坂本）・寒^近ミ（延宗本） 六九から七二

の句の運びから見て「秋ちかみ」がよりよいか。

【式目】秋（秋） 木（植物） 木与木（可隔五句物） 葉字 草の葉・

竹の等は可隔五句也（一座四句物）〔連歌新式追加並新式今案等〕（）

【作者】 実中

【語釈】 ●木の間 木々の間。●一葉 (特に散り落ちる) 一枚の葉。

【付合】 「一葉」は一般には桐の一葉をさすが、ここは前句にある柳の葉が一葉散り落ちたとした。「今朝よりは柳の一葉かつちりておのが木末も秋は知りけり」(沙玉集・初秋・六八)

【一句立】 木々の間から一枚葉が落ちるのにも、秋の寒さが感じられて。

【現代語訳】 (前句 川べりの柳には高く風が吹き、葉が緑色になびいている。) 木々の間から一枚葉が落ちるのにも、秋の寒さが感じられて。

(三折 裏 六) 木の間より一葉の落つる秋寒み

七〇 まだ露残る冬ノキマの夕かけ 心敬

【校異】 冬ノキマ―冬ノキマ(野坂本) この本文は「冬の夕かけ」とあり、「冬」が不審であったのであろう、「本ノマ、」と書き加えられている。本文に従えば、「露」とそぐわない。

【式目】 露(秋) 露如此降物(可隔三句物) 夕与夕(可隔五句物)

【作者】 心敬

【語釈】 ●夕かけ 夕方、物にさえぎられ日の光が当たらない場所。または、夕暮れ時の弱い日の光。万葉歌による言葉であるが、この

句と次の句の付合の根拠となる万葉二二五九番歌は、いずれの意味

とも決め難い。「影草の生ひたるやどの夕影に鳴くこほろぎ(蟋蟀)

は聞けど飽かぬかも」(万葉・巻十・二二五九)。万葉歌においては「朝顔は朝露負ひて咲くといへど夕影にこそ咲き増さりけれ」(万葉・巻十・二二〇四)、「夕影に來鳴くひぐらしここだくも日ごと

に聞けど飽かぬ声かも」(万葉集・巻十・二二五七)の用例は、夕方の日の光がふさわしいであろうかと考えられるので、二二〇四歌の影響下にある「消とまる露こそなければ種ノキマの夕かけまたぬ花のまがきは」

(草根集・籬種・一五一八・永享二年七月十日詠)、「老はなほ夕かけまたぬ露ながらうつろふはなをはかなくやみん」(宗祇集・種を・一

一五)は、夕暮れ時の日の光の意味となるであろうが、当該句は場所か。熊野千句第七百韻の句「遅日も竹の葉分に移ひて夕かけと

をさふし待の月」(四九／五〇・行助／心敬)は光と思われる例である。なお、万葉詞という点から見ると、六七句の「朝川」同様、季節を冠して使用している点の類似が気になる。

【付合】 「落つる」に「露」をつけ、葉は落ちて露は残っていると対比させた。露は元来夕暮れ時を待たない、はかないもの。六〇句と発想は同根。

【一句立】 夕暮れ時になっても、まだ露が残っている、冬の夕暮れの寒く日のあたらない場所。

【現代語訳】(前句 木々の間から一枚葉が落ちるのにも、秋の寒さが感じられ) まだ露が残っている、冬の夕暮れの寒く日のあたらな場所。

(三折 裏 七) まだ露残る冬本の夕かけ

七一 きりぎりす垣根をたのむ声はして 専順

【式目】きりぎりす(秋)(一座一句物) 垣根(牆)(居所・体) 音声に響(可嫌打越物)

【作者】専順

【語釈】●きりぎりす 現在のコオロギ。「Qin.guisu. キリギリス(蟋蟀) こおろぎ」(『邦訳日葡辞書』)。「籬は秋に荒れ残る頃/頼むらし我が床近ききりぎりす」(新撰菟玖波集・秋上・一条冬良・六七六)。
●垣根をたのむ 垣根を寒さをふせぐ頼みとして。「七月在野、八月在レ宇、九月在レ戸、十月蟋蟀入二我牀下」(毛詩・国風・七月)。
●初秋(七月) 野原にいる蟋蟀は、寒さが厳しくなるにつれ、八月には軒下で鳴き、九月には戸口におり、初冬(十月)になると、床の下にもぐりこんで鳴くという。「うらがるるかやのかきねのきりぎりす夜風をさむみ声弱るなり」(夫木抄・きりぎりす・一五〇〇)。
○・後一条入道関白)。

【付合】「影草の生ひたるやどの夕影に鳴くこほろぎ(蟋蟀)は聞け

ど飽かぬかも」(万葉集・巻十・二二五九)により、「夕かけ」に「きりぎりす」を付けた。なお、西本願寺本は蟋蟀に「きりぎりす」の訓を付ける。中世以前には「きりぎりす」と読まれていた(↓参考文献柳澤氏論文)。また、既に「我のみやあはれと思はむきりぎりすなく夕かけのやまとなでしこ」(古今集・秋上・二四四・素性法師)がある。

【一句立】きりぎりすが、垣根を寒さからのがれる頼みとして、身をひそめて鳴いている声はしていて。

【現代語訳】(前句 まだ露が残っている、冬の夕暮れの、寒く日のあたらな場所) きりぎりすが、寒さを防ぐ頼みとして垣根にひそみ、鳴いている声はしていて。

(三折 裏 八) きりぎりす垣根をたのむ声はして)

七二 長き夜寒み我が床の上 専順

【校異】さむみーさひし(野坂本)・寒ぬみ(延宗本) 順―祇(野坂本)

【式目】長き夜(秋) 「長夜トアラバ、秋のよ也。冬にも長夜はあるべし。」(連珠合璧集) 夜(夜分) 床(居所・体) 床(夜分)

【作者】専順

【語釈】●床の上 寢床の上。

【付合】付合では前句の「きりぎりす」が鳴く時期の、夜寒の様を付けた。「きりぎりす草葉にあらぬわが床のつゆをたづねていかでなくらん」(千五百番歌合・秋二・一二〇二・藤原良経)。

【二句立】秋の長い夜は寒く、私の床の上も冷えて。

【現代語訳】(前句 きりぎりすが、寒さを防ぐ頼みとして垣根にひそみ、鳴いている声がしていて。)秋の長い夜は寒く、私の床の上も冷えて。

【備考】野坂本の作者名は宗祇であるが、長松本では専順が二句続くことになり不審。また、69句には「秋寒み」があり、表現も重複する。

(三折 裏 九) 長き夜寒み我が床の上

七三 月ぞ憂き人は誰とか惜しむらん 心敬

【式目】月(秋) 人(人倫)

【作者】心敬

【語釈】●月ぞ憂き 月の恨めしいことよ。心敬は後朝の別れの空に残る月をこう表現することが多い。ただここは、恋人の訪れも得られなかった女性の歎きであり、六三句と似た情景となる。「月ぞうきかたぶくかげをながめずはまつよのふくる空もしられじ」(玉葉集・恋二・一四〇六・冷泉為相女)。「暁起きに馴るる夜な夜な／

月ぞ憂き幾帰るさに残るらむ」(新撰菟玖波集・恋上・二五八四・心敬)。

●惜しむ 月の傾くのを惜しみ、また別れを惜しむ。「あけば又秋のなかばもすぎぬべしかたぶく月のをしきのみかは」(新勅撰集・秋・二六一・藤原定家)。

【付合】秋の夜長をそのままに、月と恋の心情を重ね、次から恋に完全に転じるきっかけを与えている。

【二句立】思えば月は恨めしい。私のところに来てはくれないあの人、彼はいつたい誰とこの月を惜しんでいるのだろう。

【現代語訳】(前句 秋の長い夜は寒く、私の床の上も冷えきついで。)思えば月は恨めしい。私のところに来てはくれないあの人、彼はいつたい誰とこの月を惜しんでいるのだろう。

(三折 裏 一〇) 月ぞ憂き人は誰とか惜しむらん

七四 別れもよその横雲の空 行助

【式目】別れ(恋) 横雲(聳物) 空 雲如此聳物(可隔三句物) 空

空だのめなど云ては此外也 (一座四句物)

【作者】行助

【語釈】●別れもよそ 別れも私とは関係ないことで。●横雲の空 雲が横にたなびき流れている空。「春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら」(新古今集・春上・三八・藤原定家)か

ら詠みこんだ語句で、雲が横にたなびくさまを別れとたとえた。「暁はゆくへもしらぬ別かな峰の嵐の横雲の空」(統後撰集・後朝恋心・八二七・藤原教実)。

【付合】「月」に「空」、「惜しむ」に「別れ」を縁づけた。「別れもよそ」は、付合では、「後朝の別れも、あの人が来てくれない自分とは関係のない事柄であつて」の意となる。

【二句立】私とは無縁な空の上で、雲が横に離れ、たなびいている。
 【現代語訳】(前句) 思えば月は恨めしい。私のところに来てはくれない、あの人、彼はいつたい誰とこの月を惜しんでいるのだろうか。(後朝の別れを惜しむことも、あの人が訪ねてくれない私とは関係ないことで、明方の空には、こちらも私と無縁に、横に別れていく雲がたなびいている。

(三折 裏 一一) 別れもよその横雲の空

七五 はるばるとしらぬさかひに旅立ちて

宗祇

【校異】 祇一怡(野坂本)

【式目】 旅立ちて(羈旅) 旅与旅(可隔五句物)

【作者】 宗祇

【語釈】 ●はるばると 「恋しさに恐びしかどもはるばると旅の空までたづね来にけり」(堀河百首・旅恋・一一二〇・源師頼)。

らぬさかひ 知らない土地。「おもへどもいかにならひしみちなればしらぬさかひにまどふなるらん」(後拾遺集・雑五・一一五七・慶範法師)。「しらぬさかひをしるよしもがな／おもひやる夜はの夢にやみえつらん」(表佐千句第四百韻・八〇／八一・紹永／専順)。

【付合】 前句の「別れ」を旅立ちの別れととりなす。

【二句立】 はるばる遠く知らない土地に旅立つて。

【現代語訳】(前句) 旅立ちの別れもそ知らぬ顔で、雲が横にたなびいている空の上。(ここからはるばる、知らない地方に旅立つていく。

(三折 裏 一二) はるばるとしらぬさかひに旅立ちて

七六 今日^{けふ}はいつくにやどりからまし 幸綱

【校異】 けふは一とりハ(野坂本)

【式目】 やどり(羈旅) やどり(二座二句物)『連歌新式追加並新式今案等』(肖柏追加)に「宿 只一、旅一、やどり此外に有り。鳥のやどり・露のやどりなどの間に又有べし。」とある。(今日(二座二句物) 今日に昨日、明日(可嫌打越物(新式今案))

【作者】 幸綱

【語釈】 ●やどりからまし 宿を借りようかしら。「やどり」を「借り」と詠む和歌は正徹、心敬にごくわずかある程度である。「うきまくら夢もおどろくことなかれ馬屋のおさにやどりかる夜は」(心敬

僧都十鉢和歌・旅泊夢・二九六。「やどり」はこの百韻では、脇句、四二句で使用されており、三度目の使用となる。

【付合】旅中、一日歩んだ夕暮れ時に、今夜の宿りに思いをめぐらした形の句をつける。

【二句立】今日はどこに宿を借りようかしら。

【現代語訳】(前句) はるばる遠く知らない土地に旅立つて。今日はどこに宿を借りようかしら。

(三折 裏 一三) 今日はいづくにやどりからまし

七七 花咲けば木陰をあまたたどりきぬ 専順

【式目】花(春) 木(植物) 木与木(可隔五句物)

【作者】専順

【語釈】●木陰をあまた 多くの木の下陰を。花を求めて遠路やってきたことを示す。「わがならぬ木陰なりとも花しあらばいづれの宿に行きかともらん」(碧玉集・処処尋花・一五八)。

【付合】「宿トアラバ、花」(連珠合璧集)。花見に訪れ、立ち去り難くて一夜を明かすと前句をとりなす。「若草高き故郷の道／花落て木かげを分る人もなし」(行動連歌・二七七三／二七七四)の付合のように、一転、落花の後は誰も訪ねてこないことになる。

【二句立】桜の花が咲いたので、木陰をたくさんたどってはるばる

やってきた。

【現代語訳】(前句) 今日はどこに宿をかりようかしら。(桜の花が咲いたので、たくさん木の陰をたどり、はるかここまでもやってきたのだ。

(三折 裏 一四) 花咲けば木陰をあまたたどりきぬ

七八 いざ桜とて枝を手折らん 大況

【校異】をーや(野坂本)・を(延宗本) 況―説(野坂本)

【式目】桜(春)

【作者】大況

【語釈】●いざ桜 さあ桜よ。桜への呼びかけ。どのように呼びかけたのかは難しいところだが、枝に残らずともまだ盛りとなれるという意味を込めて、折られることへの同意を求め、持ち帰り、手みやげとするとしているか。「いざ桜ちるをつらさにいひなさで梢の外のみさかりともみん」(新拾遺集・春下・一五二・藤原基任)。「いざ桜我も散りなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ」(古今集・春下・七七・承均法師)、また、「いざ桜散らばありなむひとさかりなれば憂きめ見えもこそすれ」(伊勢物語・異本歌・二二七)。「はるかなる都のつとの花散て／桜をいざと誘ふ下風」(小鴨千句第二百韻・八七／八八・心敬／専順)。

【付合】「花」に「桜」、「木陰」に「枝」と内容をより詳しく付ける。

【一句立】「さあ、桜よ。」と言って、枝を手折ろう。

【現代語訳】（前句）桜の花が咲いたので、たくさんの木の陰をたどり、はるかここまでもやってきたのだ。「さあ、桜よ。（散り残つてみにくくなるまえに手折られなさいよ）」といって枝を手折ろう。

（名残折 表 一） いざ桜とて枝を手折らん

七九 春もただ君がためには惜しからず 心敬

【校異】 やおしからん―は惜からず（野坂本）・やおしからん^て（延宗本）野坂本により訂正

【式目】 春（春）

【作者】 心敬

【語釈】 ●惜しからず 七八が「らん」留めであつて、七九が長松本ではまた「らん」で終わるのは不自然である。野坂本は「は惜しからず」とし、延宗本は「は惜しからで」の異文を注記する。ここでは野坂本にしたがつて置く。「君がため」とのつながりは「君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな」（後拾遺集・恋二・六六九・藤原義孝）を思わせ、その影響下にあるう。

【付合】 さあ桜よ、と云つて花盛りの枝を折り取ろう、という前句に、桜を咲かせている春もあなたのためには花の枝を惜しむことはな

い、と付けた。

「春」と「惜しむ」の取り合わせは、おのずから「惜春」の情に及ぶ。したがつて、春の季節が終わることを惜しむ気持ちを含意させての句作りではないか。一句としては花の句ではなく、行く春を惜しむ句である。

【一句立】 あなたに逢えるまでは惜しいと思わなかつた私の命のように今までは惜しいと思わなかつた春なのだが、恋しいあなたと逢えてもつと長らえたいと思うようになるのと同様、この桜咲く春という季節に出会えた今となつては、輝かしい春が去つて行くのを惜しいと思うし、あなたのためにも惜しいと思うようになったことよ。それは、あなたのためにだけ、惜しいのではない。私にとつても惜しいのだ。

【現代語訳】（前句）「さあ桜よ」と呼びかけて、盛りの内に枝を折り取ろう。春もこのしわざをあなたのためなのだから惜しむことはないだろう。

（名残折 表 二） 春もただ君がためには惜しからず

八〇 暮れ待つ程の長き日も憂し 元勲

【校異】 の―の^に（延宗本） 輒一説（野坂本）

【式目】 長き日（春）

【作者】 元胤

【語釈】 ●暮れ待つ程 日の暮れる時を待つ間。「あさばらけおきつる霜のきえかへり暮れ待つほどの袖を見せばや」(新古今集・恋三・一一八九・花山院)。「暮れ待つか妻こひわたるほと、ぎす」(行助句集・一四三二・夏)。●長き日 夏が近くなり、日照時間が長くなってくるさま。春歌にも夏歌にも使われる。「ながき日をくらせるだにもうき中にたのめぬ月夜など霞むらん」(前撰政治家歌合嘉吉三年・春待恋・三五五・丹羽盛長)。「春は音せぬ松のはま風／永日に漕ぬる船の遠くきて」(熊野千句第十百韻・二／三・細川勝元／安富盛長)。

【付合】 一句では恋人の訪れる夜をまちわびる、恋のイメージをも持つ。

【一句立】 日の暮れるのを待つ時に、日が長くなかなか暮れないというのもつらいことだ。

【現代語訳】 (前句) 春もただ、あなたのためにだけ、惜しいのではない。私にとっても惜しいのだ。暮れるのを待つ時に感じる、長くなった日も、春が終わりそうに私にとってはつらいことなのだ。

(名残折 表 三) 暮れ待つ程の長き日も憂し

八一 命には朝の露をたのまめや 宗祇

【校異】 めーめ^す(延宗本)

【式目】 露(秋) 命只一虫の命などに(述懐・一座二)句物 露如此降物(可隔三句物)

【作者】 宗祇

【語釈】 ●朝の露 朝露。日がのぼれば蒸発する、はかないもの。「はかなきは我が身なりけりあさがほのあしたの露もおきてみてまし」(和泉式部統集・二九四)。露からは命も連想される。「はかなくぞあしたの露の命もてこの世とのみは契置きける」(藤葉集・恋下・六〇四・今出川院近衛)。

【付合】 「暮れ」に「朝」を付ける。前句の「暮れ待つ」を、朝に生まれても、夕暮れまで保てないはかない命のさまと取った。「命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし」(徒然草第七段)。具体的には、朝に生まれ夕べに死ぬとされたかげろふが意識されており、心敬にはかげろう科の昆虫であるひをむしを詠む付合がある。「常なき身をば暮るにもしれ／ひほ虫の命かくるを問もせで」(年次不詳何路百韻「白妙の」・八八／八九・永澤／心敬)。

【一句立】 命を保つには朝露をたのみとするのだろうか。

【現代語訳】 (前句) 日の暮れるのを待つ時に、日が長いのもつらいことだ。朝露をたのみにして生きながらえているのだろうか。

(名残折 表 四) 命には朝の露をたのまめや

八二 小笹がもとの夜半の虫の音 宗怡

【式目】 虫の音 (秋) 小笹 (植物) 草与草 (可隔五句物) 夜半

(夜分) 虫 (一座二句物) 音声に響 (可嫌打越物)

【作者】 宗怡

【語釈】 小笹 小さい笹。「かた岡の朝の露に風過ぎてそよぐ小笹の音の激しさ」(玉治百首・雑・三四七四・少将内侍)。●夜半 夜更け過ぎ。「少なくなりぬ夜半の虫の音/今日は山昨日は野べの草枕」(園塵第三・雑下・一五三三/一五三四)。

【付合】 「露」から「小笹」「虫」を導き、「命」から「虫」もつけた。

「虫トアラバ、命 露」(連珠合璧集)。虫の命も短くはかない。「住み果つべしや露の世中/鳴虫の命も人にあらそひて」(竹林抄・秋・三三八・能阿)。「朝」と「夜半」も対比である。

【一句立】 夜中過ぎ、小笹の根元からは虫の声が聞こえる。

【現代語訳】 (前句) はかないその命を保つには朝露をよりどころにしているのだろうか。夜更けても、小笹の根元からは虫の声が聞こえる。

(名残折 表 五) 小笹がもとの夜半の虫の音

八三 寝られじな月に風吹く仮枕 行助

【式目】 月 (秋) 仮枕 (驛旅)「旅トアラバ、かりねかり枕」(宿ト

アラバ、かり枕」(連珠合璧集) 月如此光物 (可隔三句物) 月与月

(可隔七句物) 風与風 (可隔五句物)

【作者】 行助

【語釈】 ●寝られじな 眠れないだろうよ。●仮枕 旅寝をするこ
と。仮(刈り)は、前句「小笹」と縁語。「かり枕小笹が露のおきふしになれて幾夜の有明の月」(玉葉集・旅・一一四九・二品法親王性助)。「夢路をこゆる川波の音/小笹吹く嵐の下の仮枕」(園塵第四・一五四一/一五四二)。

【付合】 虫の音から旅中の泊りの日々を付ける。

【一句立】 寝られないであろうよ、月が出、風が吹いている旅寝では。

【現代語訳】 (前句) 夜中過ぎ、小笹の根元からは虫の声が聞こえる。
寝られないであろうよ、虫の音に加えて、月が出、風も吹いている旅寝では。

(名残折 表 六) 寝られじな月に風吹く仮枕

八四 思ひやなるも秋の故郷 専順

【校異】 なる^{半歌}なるも秋の故郷 (延宗本)

【式目】 秋 (秋) 故郷 (一名所引合) (驛旅・一座二句物)

【作者】 専順

【語釈】●秋の故郷 人も訪れず、枯れ野の広がる秋の故郷。「昔見し月も涙にくもりけり草にやつる秋の故郷」(檜葉集・雑三・九三九・仍美法師)。

【付合】「仮枕」に「故郷」を付け、旅の句を続けている。

【二句立】「思ひやなる」の部分の意味不明だが、「思いはせるのは、寂しく人もいない秋の故郷である。」と解しておく。

【現代語訳】(前句 寝られないであろうよ、月が出、風も吹いている旅寝では。) 思いはせるのも、秋の荒れた故郷なのだ。

(名残折 表 七) 思ひやなるも秋の故郷

八五 衣打つ音は聞けども主知らで 大況

【式目】衣打つ(秋) 音声に響(可嫌打越物)

【作者】大況

【語釈】●衣打つ音 砧で衣を打って柔らかくする音。●主知らで音の主が誰かわからないで。「牛かふ野中日は暮にけり／とをざかる笛はそれとも主しらで」(三高千句第三百韻・六二／六三・宗祇)。

【付合】「故郷」に戻っても、知る人もなくなっているという意を付す。

【二句立】衣を打つ砧の音は聞こえるけれど、その音の主はわからない。

【現代語訳】(前句 思うのは、寂しく荒涼とした秋の故郷。) 衣を打つ砧の音は聞こえるけれど、その音の主はわからない。

(名残折 表 八) 衣打つ音は聞けども主知らで

八六 袖の浦わによする夕浪 心敬

【式目】雑。袖の浦(名所) 浦(水辺・体) 夕浪(水辺・用)

水辺の体と用を一句の内に用いており、不審。夕風・夕霜の夕字(可替紙紙)(一座四句物(連歌新式追加並に新式今案等))

【作者】心敬

【語釈】●袖の浦わ 袖の浦の入りくんだ海岸。袖の浦は出羽国の歌枕。今の山形県酒田市にあり、「浦」を「裏」と掛ける。「Yrauaウラワ(浦廻)Vra(浦)に同じ。浜辺。詩歌語。」(日葡辞書)。「しほたるる袖のうらわのあま衣さながら月をやどしてや見る」(延文百首・月・二八四八・藤原時光) ●よする夕浪 うちよせる夕暮れ時の波。「さくや此花に花さく余所めかなつのぐむ蘆によする夕浪」(松下集・古郷花・一二一一)。

【付合】「衣」の縁で「袖」を持ってきた。夕浪寄せる夕暮れ時、「海辺擣衣」の情景。夕暮れで暗く、海岸線も入りこんでいて、衣を打つ人が誰かわからないとする。「もしほくむ袖の浦風寒ければ干さでも海人や衣打つらん」(新千載集・海辺擣衣・五〇七・藤原宗春)。

【二句立】入りくんだ袖の浦の海岸には夕波が寄せている。

【現代語訳】(前句 衣を打つ砧の音は聞こえるけれど、その音の主はわからず) 夕暮れ時になった入りくんだ袖の浦の海岸には夕波が寄せている。

(名残折 表 九) 袖の浦わによする夕浪

八七 いつの誰が涙よ海となりぬらん 元胤

【校異】 緞—説(野坂本)

【式目】 雑 海(水辺・体)

【作者】 元胤

【語釈】 ●涙よ 「袖トアラバ、浦 涙」(連珠合璧集)。「袖の浦の浪ふきかへす秋風に雲のうへまですずしからなん」(新古今・雑上・一四九七・中務)。「涙」には恋のイメージも強い。「今朝の月さはりがちなる影もよし／涙よ露よかへるさの道」(心玉集・一二八六／一二八七・心敬)。●海となりぬ 海となった。涙が海になるといふ比喩。歎きの激しさを形容する際に用いられる。「わが袖になどかみるめの生ひざらん涙はふかき海となれども」(沙弥蓮愉集・忍通書恋・五〇六)。

【付合】 袖の浦の光景の前句に、浦を眺めての疑問を付けた。

【二句立】 いったい何時頃の誰の涙がたまって海となったのだろうか

か。

【現代語訳】(前句 夕暮れになって、入りくんだ袖の浦の海岸には夕波が寄せている) それにしても、いったい何時の誰の涙がたまって海となったのだろうか。

(名残折 表 十) いつの誰が涙よ海となりぬらん

八八 古き思ひの果てやあらし 幸綱

【校異】 ふるき—ふかき(野坂本)

【式目】 雑 思に火可依句体也(可嫌打越物)

【作者】 幸綱

【校異】 「ふるき」(長松本) — 「ふかき」(野坂本) ※江藤氏校異なし

【語釈】 ●思ひのはて 物思いの行き着く先。「いまぞしるおもひのはてはよのなかのうきくもにのみまじる物とは」(金葉集二度本・雑下・六二一・平忠盛)。

【付合】 「涙」「思ひ」と縁のある言葉で付け、問いに対する答えとした。

【二句立】 古くからの思いの行き着く先はあるのかしら。

【現代語訳】(前句 それにしても、いったい何時の誰の涙がたまって海となったのだろうか) 海は古くからの思いの行き着く先で

もあるのかしら。

〔名残折 表 一一〕 古き思ひの果てやあらまし

八九 冬枯れはむぐらの宿をたのみにて 心敬

〔校異〕 冬枯れの―冬かれは（野坂本） 宿の―宿を（野坂本）

野坂本により訂正。

〔式目〕 冬枯れ（冬） 律宿（植物）

〔作者〕 心敬

〔語釈〕 ●冬枯れ 冬に草木が枯れる様子。「冬枯れのけしきこそ、秋にはをさをさおとるまじけれ」（徒然草第十九段）。●むぐら 蔓をのぼす雑草。荒れた場所を象徴する草。「たへてやは思ひありともいかがせむむぐらの宿の秋の夕ぐれ」（新古今集・秋上・三六四・藤原雅経）。●たのみにて 期待して。頼りにして。「今来んと言ひしばかりをたのみにていく長月をすぐし来ぬらん」（後鳥羽院御集・久恋・一五五〇）。

〔付合〕 伊勢物語第三段から「思ひ」に「むぐらの宿」を付けた。「思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも」伊勢物語第三段。前句の「思ひの果て」を思いの終わりと取り、思い続けたその末に、むぐらの宿に至るとした。

〔一句立〕 冬枯れの時期には、荒れはてた粗末な宿を頼りとして住ん

でいて。

【現代語訳】（前句） 古くから思い続けた気持ちには終わりがあ

【備考】 第四九句に「しげかりし園の下草冬枯れて」（行助）と「冬枯れて」がある。

〔名残折 表 一一〕 冬枯れはむぐらの宿をたのみにて

九〇 心の月になにかさはれる 専順

〔式目〕 心の月（釈教） 心月已上非夜也

〔作者〕 専順

【語釈】 ●心の月 心の中で達している仏道の悟り。悟りを開いた心を、曇らない月に例えている。真如の月。「いかでわれ清く曇らぬ身になりて心の月の影を磨かん」（山家集・九〇四）。「にござる世になれば法もや無るらん／心の月をさしてしらはや」（初瀬千句第六百韻・六九／七〇・宗硯／専順）。●なにかさはれる どうしてさまざまになろうか。

【付合】 「宿」に「月」を付けた。「宿トアラバ、月」（連珠合璧集）。【一句立】 心中の悟りの思いにながさまたげとなろうか、いやなら

【現代語訳】(前句 冬枯れの時期には、荒れた粗末な宿を頼りとして住んでいるが)そんなことは、心の中の悟りの思いに何が障りとなろうか、いやならないよ。

(名残折 表 一三) 心の月になにかさはれる

九一 入りてこそ広きをも知れ法の道 実中

【式目】法の道(釈教)

【作者】実中

【語釈】●法の道 仏道。「尋ねばやをしへの外を敷島の道は御法の道ならずとも」(雅世集・釈教・六九三)。「言はで下にやつくすこと」の葉／えぞ知らぬおしへのほかの法の道」(宝徳四年千句第三百韻・二〇〇／二一・竜忠／宗砌)。

【付合】「心の月」に「法の道」と釈教語を付けた。

【一句立】入り難く、難しく思われる仏道も、入って見れば広くわかりやすい道であることを知るのだ。

【現代語訳】(前句 心中の悟りの思いになにかまたげとなろうか、いやならない。)狭い道に思える仏道も、入れば広い道であることがわかるのだ。

(名残折 表 一四) 入りてこそ広きをも知れ法の道

九二 教への門をさしてたづねむ 行助

【式目】教への門(釈教)

【作者】行助

【語釈】●教への門 仏道教義の教えの場。●さして めざして。「暮て行舟は音して里もなし／やどりいづくときさして尋ねむ」(葉守千句追加・九／一〇・宗友／恵俊)。

【付合】釈教の三句目。「たづねむ」で次の句の展開の余地をついている。

【一句立】仏の教えを教える場を目指し、訪ねていこう。

【現代語訳】(前句 入り難く、難しく思われる仏道も、入って見れば広くわかりやすい道であることを知る。)仏の教えを教える場を目指し、訪ねていこう。

(名残折 裏 一) 教への門をさしてたづねむ

九三 浮かれ行く妹があたりのくるる夜に 専順

【式目】恋(妹) 夜(夜分) 妹(人倫)

【作者】専順

【語釈】●浮かれ行く 浮き立った気分で行く。「よのうきにひとかたならずうかれいく心さだめよ秋のよのつき」(続後撰集・秋中・三七〇・西行)。●妹があたり 妻のいるあたり。「妹があたり我は袖

振らむ木の問より出で来る月に雲なたなびき」(万葉集・卷七・一〇八五)。「遠方人に千鳥立つ声／誰かまつ妹があたりを尋ぬらん」寛正七年二月四日何人百韻・八四／八五・慶俊／専順)。「うかれ行妹があたりは過がたみ／つれなき門にしのみわびぬる」(飯盛千句第九百韻・一七／一八・直盛／玄哉)。

【付合】前句の「門」から「妹が門」と、「妹」を連想し、句境を変えた。

【一句立】浮き立つ気持ちで歩きゆくことだ、妻の住む家のあたりが、日暮れて暗くなってきた夜になれば。

【現代語訳】(前句 仏の教えを教える場を目指し、訪ねていこう)、浮き立つ気分で向かう、妻のいる家のあたりが、日暮れてきた、そんな夜には。

(名残折 裏 二) 浮かれ行く妹があたりのくるる夜に

九四 森をみづ野の鳥飛ぶ声 宗怡

【校異】 森―森森(延宗本)

【式目】 雑 みづ野 (名所) 鳥 (動物)

【作者】 宗怡

【語釈】 ●みづ野 美豆野。山城国歌枕。京都市伏見区美豆町から久世郡久御山町にかけての野。「見つ」と掛ける。●鳥飛ぶ声 鳴

きながら飛んで行く鳥の声。「飛ぶ声」と続けるのは和歌には管見に入らない。「明くるかとうかがわらすの鳴く声に起きいでてみれば月ぞ夜深き」(夫木抄・鳥・二七二三・京極為兼)。「ゆふ山がらすうかれゆく声／雪高き入江の北の峯さえて」(老葉(吉川本)・六四七／六四八)。「交野のすゑも鳥とぶ声／天の川紅葉の橋やいそぐらむ」(園塵第四・三七九／三八〇)。

【付合】前句の「浮かれ」に「鳥」を付けた。浮かれ鳥とは、月の光りを朝と間違えてねばけて鳴くカラス。「鳥トアラバ、森 うかれ」(連珠合璧集)。また、前句の「妹があたり」を、千載集の頼政歌にならい、美豆野のあたりと取りなしている。「山しろの美豆野の里に妹をおきていくたび淀に舟よばふらん」(千載集・隔河恋・八八七・源頼政)。「妹があたりぞ離れやられぬ／陰深き美豆野の森の雨やどり」(竹林抄・雑下・一二九四・行助)。

【一句立】森を見れば、美豆野の森には、鳴きながら飛んで行く鳥の声がする。

【現代語訳】(前句 浮き立つ気分で向かう妻のいる家のあたりが、日暮れてきた、そんな夜には)森を見れば、美豆野の森には、ねぼけた鳥が鳴きながら飛んで行く声がする。

(名残折 裏 三) 森をみづ野の鳥飛ぶ声

九五 程遠き洲崎に鷺のあさりして 幸綱

【式目】 雜 鷺（動物） 洲崎（水辺・体 新式追加条々に「流洲水辺体也」とある。）

【作者】 幸綱

【語釈】 ●程遠き 遠く離れた。●洲崎 長く突き出た洲をいう。

洲は、海や川に土砂が堆積して水面に姿を現した場所。●鷺 サギ。

「洲崎を見れば立る白鷺／釣人の糞も乱れて吹風に」（文安月千句第七百韻・一六／一七・盛家／生阿）。●あさりして 餌を探して。「あさりして洲崎にたづのむれゐるを風にたちよる波かとぞみる」（為忠家初度百首・洲崎・六六一）。

【付合】 「鳥」に「鷺」を相對させ、黑白の對比を出し、「野」に「洲崎」を相對させた。「白鷺にまじる鳥のみだれ碁ををのれうつたへの浜ちにぞゐる」（草根集・六四四四・宝徳二年六月廿七日詠）。「碁とアラバ、みだれ 白黒」（連珠合璧集）。

ここの付合の参考となるものに、「からすのさはぐ森の夕霧／とぶ鷺はいづくにねぐら尋ぬらん／遠き洲崎は人里もなし」（小鴨千句第十百韻・七四／七五／七六・專順／忍誓／心敬）がある。

【一句立】 遠くの洲崎には鷺が餌を探している。

【現代語訳】（前句 森を見れば美豆野には鳥が飛び鳴き声が聞こえる。）遠くの洲崎の方では、鷺が餌を探している。

【考證】鷺が歌題として勅撰集に取り上げられてくるのは、「玉葉集」、「風雅集」の頃であり、それ以前は漢詩に見られる素材である。「洲崎」は和歌にはごくわずかにしか見られず、鷺も「あさり」する姿は詠まれにくい。ただ正徹が精力的に江に立つ鷺、飛ぶ鷺の姿を詠んでおり、正広も追隨しているゆえ、森の鳥と洲崎の鷺のとりあわせによる句の進行は、いかにも心敬の参加する時期の百韻らしい。なお、正徹には「河つらの里立別れ山城の美豆野の杜に鷺ぞ群れ入る」（草根集・水郷鷺・八五一五・享徳三年四月十日詠）がある。淀川と桂川にはさまれ、河と森が間近い狭い水郷地帯である美豆野では、鷺も鳥も混在していたのであろう。

（名残折 裏 四） 程遠き洲崎に鷺のあさりして

九六 秋ふけわたり川風ぞ吹く 宗祇

【校異】 わたり―わたる（野坂本）

【式目】 秋 ふけわたり（夜分） 川（水辺・体）

【作者】 宗祇

【語釈】 ●秋ふけわたり 秋の夜が深まって。「ふけわたる」は、深夜になること。歌では、冷泉為広や、肖柏の歌が早い例。「深渡る秋のしの里やあさなけにふくもあらしの山風の声」（為広集Ⅲ・三一九）。連歌でも文明期以後に現れてくるようである。●川風ぞ吹く

川の風が吹く。「露しげきあしまを分て立鷺のみの毛しほる、河風ぞ吹く」(紅塵灰集(後土御門院)・鷺・七一五)。「言の葉の通ふばかりを頼む身に／舟呼ぶ夕べ川風ぞ吹く」(新撰菟玖波集・羈旅・二四二／二四一三・宗砌)。

【付合】 秋の句へ転換し、また時刻も夜分へと変える。

【二句立】 秋の夜が深まり、川風が吹いている。

【現代語訳】(前句 遠くの洲崎には鷺が餌を探している。) 秋の夜が深まり、川風が吹いている。

(名残折 裏 五) 秋ふけわたり川風ぞ吹く

九七 あくるとも月な流れそ波の上 大況

【校異】 なかれーかくれ(野坂本)

【式目】 月(秋) 波(水辺・用)

【作者】 大況

【語釈】 ●月な流れそ 月よ、流れてくれるな。「ふけにけり流るる月も川波も清洲に澄める短夜の空」(なぐさみ草)。「たきつせは雪のおもかげたつ波に／やそうぢかはよ月な流れそ」(聖廟法楽千句 第四百韻・二七／二八)。

【付合】 夜更けから夜明け方に時を変えて行く。明方の月に対する名残惜しさも込める。

【二句立】 夜が明けても、月は波の上にたゆたつたままで流れてくれるなよ。

【現代語訳】(前句 秋の夜は更け、川風が吹いている。) このまま夜が明けても、月は波の上にたゆたつたままで流れてくれるなよ。

(名残折 裏 六) あくるとも月な流れそ波の上

九八 尾花にかかる露も散りけり 実中

【式目】 尾花・露(秋) 露如此降物(可隔三句物)

【作者】 実中

【語釈】 ●尾花 薄の穂。「契らずよ月は入野のおもひ草尾花がもとに露かかれとは」(為尹千首・寄思草恋・六七九)。

【付合】 水辺を離れ、尾花にかかる朝露の情景とした。

【二句立】 尾花にかかった露も散つたことだ。

【現代語訳】(前句 夜が明けても、月は波の上にたゆたつたままで流れてくれるなよ。) 尾花にかかった露も散つたことだ。

(名残折 裏 七) 尾花にかかる露も散りけり

九九 朝露のまがきの葛葉色つぎて 心敬

【式目】 朝露(秋) 籬(只一、露の籬)(一座二句物(連歌新式追加並新式今案等))

【作者】 心敬

【語釈】 ● 籬 竹や柴を編んで作った垣根。 ● 葛 豆科の多年性蔓草。広範囲に繁茂する雑草であり、秋風が吹くと葉が白く裏返り、寒さの厳しくなる頃には色づいていく。「蔦、葛、朝顔、いづれも高からず、さ、やかなる、垣に茂からぬ、よし。」(徒然草第百三十九段)。「雁がねの寒く鳴きしゆ水茎の岡の葛葉は色付きにけり」(万葉・卷十・二二〇八、玉葉集・秋上・五九三(人麿)に再録)。「つゆむすぶ秋はいくかにあらねども岡のくず葉も色付きにけり」(清輔集・紅葉・一七五)。

【付合】 秋の風物である「尾花」に「葛」を加え、色づいたさまの句とした。挙句の一句前となり、「籬の葛葉」は亭主宅の眼前の情景を詠みだしてきたものであろうか。

【二句立】 朝露の下りた垣根の葛の葉は赤く色づいていて。

【現代語訳】 (前句 尾花にかかった露も散ったことだ。)朝露の下りた垣根の葛の葉は色づいていて。

【備考】 「朝露」は、九八句にも「露」があり、不審。「朝霜」の誤字と考えれば、例えば「霜迷ふ庭の葛原色変へて恨みなれたる風ぞ激しき」(秋篠月清集・六五七)などの古歌の例もあり、「霜とあらば、(朝霜)色づく」(連珠合璧集)からも自然であるが、テキストからはその証跡は一切見えない。

(名残折 裏 八) 朝露のまがきの葛葉色づきて

一〇〇 庭のまさごは幾重なるらん 行助

【校異】 はーや(野坂本)・ハ。(延宗本) なるーしく(野坂本)・なるしく(延宗本)

【式目】 雑 庭(居所・用)

【作者】 行助

【語釈】 ● 庭のまさご 庭に敷いた砂。数かぎりなくあることから尽きることない長久の意を表わした。「庭の真砂を朝夕ぞ踏む／君が代に限りも知らず仕へ来て」(新撰菟玖波集・賀・一三二六／一三一七・藤原雅俊朝臣)。「君がへん春の数かな真砂山／わかみどりそふ松ぞ木高き」(所々返答第二状・寛正六年張行(『連歌論集三』頭注推定)百韻・発句／脇・心敬／畠山政長)。

【付合】 「まがき」から「庭」を付け、祝言の意味を「真砂」で出した。発句と同様、亭主宅の眼前の風景をほめたたえる、家ほめの句。

【二句立】 庭の真砂は、幾重にも重なりどのくらいの数あるのだろう、無限にあり、めでたいことだ。

【現代語訳】 (前句 朝露の下りた垣根の葛の葉は色づいていて。)庭の真砂は、幾重にも重なりどのくらいの数あるのだろう、無限にあり、めでたいことだ。

【考察】 野坂本は「庭の真砂や幾重しくらん」であり、真砂には「し

く」がふさわしいか。

引用文献概一覽

式目の引用は京大本『連歌初学抄』（『京都大学藏貴重連歌資料集1』（平成二三・臨川書店）による。

『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合には、木藤才藏『連歌新式の研究』（平成一市・三弥井書店）所収太宰府天満宮文庫本によった。

【語釈】等における和歌・漢詩句の引用は断らない限り『新編国歌大観』による。『草根集』は日次本（『私家集大成五』（昭和四九・明治書院）所収書陵部藏御所本）を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国歌大観第八卷』所収の類題本（ノートルダム清心女子大本）の表現も付記している。また、万葉集の歌番号は西本願寺本の番号によった。連歌等の引用は、以下に示す諸本による。

連珠合璧集：『中世の文学 連歌論集一』（昭和六〇・三弥井書店）
連歌寄合：『連歌寄合集と研究（上）』（昭和五三・未刊国文資料刊行会）所収祐徳稻荷神社藏中川文庫本

産衣：『連歌法式綱要』（一九三六・岩波書店）

菟玖波集：金子金治郎『菟玖波集の研究』（昭和六〇・風間書房）

竹林抄：新日本古典文学大系『竹林抄』（一九九一・岩波書店）所収

蔵島神社宮司野坂元良氏蔵本

新撰菟玖波集：『新撰菟玖波集全釈』第一、第八卷（平成十一、十

九・三弥井書店）所収筑波大学蔵本

文安雪千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収静嘉堂文库

蔵本

顯証院会千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収内閣文库

蔵本

宝徳四年千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）城崎温泉寺蔵

本

小鴨千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）小松天満宮本

熊野千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文库本

河越千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収内閣文库蔵本

伊庭千句：古典文庫『千句連歌集七』（昭和六〇）所収松井明之氏蔵

本

看聞日記紙背永三十一年十月二十六日片何百韻：『圖書寮叢刊』看聞日記紙背文書・別記』（昭和四〇・養徳社）

文安四年五月廿九日何船百韻：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭

和四七・角川書店）所収高野山大学附属図書館本

寛正三年正月二十五日何人百韻：天理図書館綿屋文庫蔵本（日文献

D B）

寛正四年三月宗祇独吟何船百韻：北海学園北駕文庫蔵本（日文献D

B）

寛正四年六月廿三日唐何百韻：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭

和四七・角川書店）所収太田武夫氏本

寛正六年正月十六日何人百韻：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭

和四七・角川書店）所収天満宮文庫本

寛正七年二月四日何人百韻：新潮日本古典集成『連歌集』（昭和五

四・新潮社）

宗御句集：貴重古典籍叢刊十一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角

川書店）所収大阪天満宮文庫本

行助句集：貴重古典籍叢刊十一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角

川書店）所収大阪天満宮本

吾妻辺云捨：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）

所収天理図書館本

心玉集・心玉集拾遺：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・

角川書店）所収静嘉堂文庫本

連歌百句付：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）

所収天理図書館本

梵灯庵袖下集：島津忠夫著作集第五卷『連歌俳諧―資料と研究―』

（二〇〇四・和泉書院）所収西高辻家本

宗祇袖下：『中世の文学』連歌論集二（昭和五七・三弥井書店）所

収九大附属図書館蔵本

所々返答：『中世の文学』連歌論集三（昭和六〇・三弥井書店）所

収本能寺蔵本

長六文：『中世の文学』連歌論集二（昭和五七・三弥井書店）所収

大阪天満宮文庫蔵「一紙品定」合綴本

新古今集聞書（東常縁原撰本）：『新古今集古注集成』中世古注編

1（一九九七・笠間書院）所収黒田家旧蔵本

新古今抜書抄：『新古今集古注集成』中世古注編1（一九九七・笠

間書院）所収松平文庫本

日葡辞書：『邦訳日葡辞書』（一九八〇・岩波書店）

老耳：古典文庫『老耳（宗長第三句集）』（昭和五一）所収天理図書館

館綿屋文庫本

白氏文集：『新釈漢文大系』（明治書院）

光源氏一部連歌寄合―良基連歌論集 三（昭和三〇・古典文庫）

園塵第三：『統群書類従第十七輯下』所収本

園塵第四：早稲田大学蔵資料影印叢書『連歌集（二）』所収早大本

至宝抄：岩波文庫『連歌論集下』（一九五六・岩波書店）

年次不詳何路百韻「白妙の」：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（昭

和四七・角川書店）所収天満宮文庫本

聖廟法楽千句：『兼載独吟聖廟千句―第一百韻を読む―』（二〇〇

七・和泉書院）

八雲御抄：『八雲御抄の研究』所収国会図書館本（一九九二・和泉

書院）

徒然草：新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』（一九八九・岩波書

店）

言塵集：『言塵集―本文と研究―』（二〇〇八・汲古書院）所収松平

文庫蔵本

参考文献

佐藤智広「〈夜寒〉考―中世和歌における質的転換を中心に―」（『中

世文学』第四十五号・平成二二・八）

小野恭靖「『朝川』考―『宗安小歌集』二五二番歌をめぐる―」（『学

大國文』第40号・一九九七・二）

柳澤良一「『きりぎりす考―虫の文学史の試み―』（『国語と国文学』

74巻11号・平成九・一一）